

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第三卷 (十三號)

昭和九年三月一日發行

論叢

砂糖消費税に就きて……………

法學博士 神戸正雄

昭和五年の我國の國富を論ず……………

經濟學博士 沙見三郎

古典派恐慌論と動態論との關係……………

經濟學博士 谷口吉彦

時論

團體生命保險の官營問題……………

經濟學博士 小島昌太郎

研究

統計解析に於ける基礎的問題……………

經濟學士 蜷川虎三

ブウニヤティヤンと新信用論……………

經濟學士 松岡孝兒

百貨店の植民地進出……………

經濟學士 堀新一

說苑

陶業に於ける瀬戸・東濃・名古屋の關係……………

經濟學士 菊田太郎

ロシアに於ける所得税の發達……………

經濟學士 伊藤武夫

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

- 1) 鐵道省運輸局、陶磁器及土器=關スル調査、五九頁。
- 2) 名古屋鐵道局、名古屋附近の陶磁器、一九頁。
- 3) 名古屋鐵道局、前掲。

$$\begin{array}{l} 2) \\ 3) \end{array}$$

姓名

間に切實な競争關係、緊密な連絡關係があり、この間にあつて各立地因子が各々その特色を發揮してゐるのだからである。それで、時代の變遷は各地區の陶磁業に如何なる變化を與へたか、かく變化した陶磁業は他の地區に如何なる影響を及ぼしたか。これら視角から濃尾の陶磁業を瞥見しやうと思ふ。

一 明治以前の分布狀況

維新前においては、三地區の内、名古屋は單に市場の一たるに止まり、陶磁器の生産は瀬戸・東濃に限られ、特に瀬戸が大部分を占めた。

瀬戸市或はその附近は、上古既に瓷器を出した形迹があり、特に陶祖加藤四郎左衛門の定住後、子孫蔓延し、陶器就中茶器の産地として名聲を博してゐた。併し、多量の製品を廣く供給して、西の有田を凌ぐに至つたと同時に、現在から遡及して立地事情を比較的明瞭に辿り得るのは、享和年間、加藤民吉が磁器製造を傳へて以來の事に屬する。

瀬戸陶磁業の第一の基礎は、良好な粘土と豊富な燃料との存在であつた。詳言すれば、黒雲母花崗岩の分解によつて生じた蛙目粘土、花崗岩の細片が低所に堆積し、多量の炭質物を含むに至つた木節粘土、何れも粘性に富み、耐火力強く、優秀な原料である。⁴⁾これら粘土は、蛙目が水簸すれば二割内外となると云ふ風に、精製によつて著しく重量を減じ、又精製後は直ちに成型・焼成を要するから、陶磁業をその産地に固定せしめた。又、發熱量が比較的大きく、焰が長いために、登龍の燃料として缺くべからざる黒松も、現在と異なり、四周の山地に豊富であつたが、これは、生産過程中において完全に重量を喪失する事とて、一層強く生産を索引した。第二には、陶祖以來の傳統に養成された熟練な工人があつた。中頃製磁の開始の如き劃期的な出來事があつたとは云ふものゝ、足轆轤・登龍による形式が數百年に亘つて殆んど變化せず、科學的な處理は不可能で、専ら傳來の技能に俟つ有様であつたから、立地因子としての工人の意義は、原料に勝るとも

4) 愛知縣商品陳列所、愛知縣の化學工業、一七頁。
 5) 名古屋鐵道局、前掲、二頁。
 6) 愛知縣、愛知縣紀要、二頁以下。
 名古屋市編、名古屋史要、一三九頁。
 瀬戸町誌、五三頁以下。陶磁器及土器ニ關スル調査、二頁以下。

決して劣るものではなかつた。

第三に、歴代の領主何れも有力者で、陶磁業の保護統制に努力すると同時に、他の競争をよく防壓するだけの力を具えてゐた。保護統制では、織田信長・徳川義直についても種々の事績が傳へられてゐるけれども、特に積極的になつたのは、製磁開始以後であり、その手段としては、燃料の供給を確保した森林行政の如きをも看過し得ないが、最も有効に作用したのは、市場との連絡を可能にした專賣制度である。元來、陶磁器は、古くは日常品よりは寧ろ奢侈品に屬し、價格が高いために、市場からかなり遠隔の地點でも生産され得、殊に磁器は硬度高く、一層大きな運送性を示してゐた。併し、一般に運輸・通信が発達せず、割據的な精神・制度の有力な時代にあつて、遠隔の市場に多量の供給を行ふことは容易でなかつたが、尾州藩の專賣制度は、よくこれが方法を與へたのである。即ち、藩は瀬戸に取締役を置いて陶竈を管理せしめ、製品は瀬戸で直ちに販賣することを許さず、悉く名古屋・江戸の藏元商

陶業における瀬戸・東濃・名古屋の關係

人に廻送せしめた。そして、藏元は、かく專賣の特權を興へられた代償に、販路の維持・擴張に努力し、支那産の呉須を長崎で購入する等、市場との連絡を圓滑にする義務を課せられてゐた。³⁾ かく保護統制する反面に、他の競争を排除する手段として、陶磁業者の移住を禁じ、古く義直時代には、戦亂を美濃に避けてゐた陶祖の子孫を歸還せしめ、加藤民吉が熱田新田に築竈した際にも、瀬戸業者の願を容れ、瀬戸に移轉せしめてゐる。

東濃は、瀬戸と地続きであり、立地條件も略々等しいから、瀬戸陶工の移住・築竈が屢々行はれたのも、自然の勢であつた。併し、藩は、瀬戸との關係上、竈數を僅かに限定し、製品も美濃焼と稱することを許さず、瀬戸物と同一の藏元に販賣せしめた。その結果、東濃の陶磁業は、産額も少ない許りでなく、一般に認められるに至らなかつたのである。⁹⁾

要するに、維新前にあつては、瀬戸・東濃、特に前者は、豊富な資源、祖先傳來の技能、爲政者の保護に

第三十八卷 七六一 第三號 一三一

7) 以下。瀬戸町誌、七〇頁。名古屋市勸業課、陶磁器 =
8) 以下。八九頁。一四〇頁以下。
9) 以下。一四〇頁以下。

よつて、國內市場に優越な地歩を占めてゐた。併し、鎖國封建制度に伴ふ制約のために、一定限度以上の發達は阻止されて居り、立地の推移は少しも容認されなかつたのである。

二 名古屋における上繪付

かゝる瀬戸・東濃の獨占が破れ、從來單なる市場に止まつた名古屋が生産に干與するに至つたのは、云ふまでもなく、封建制度の崩壊による營業の自由を前提とするが、この前提の下において變化を實際に發生せしめた根本動因は、市場の擴大、就中外國貿易の發展による大量需要の發生である。

瀬戸系統陶磁器の貿易は、安政年間、三井の手で行はれた瀬戸産食器の米國輸出を嚆矢とする。¹⁰⁾そして、逸早く明治四年瀬戸に瀬戸物商社を興し、七年東京に支店を設け、十四年これを横濱に移して輸出を行つた瀧藤萬次郎の如き例も存在するけれども、瀬戸の陶業者は、一般に、問屋の來訪を受け、ゐながら取引する

慣例であつたから、輸出業務は専ら横濱或は神戸の貿易商の手に歸した。そして、これら貿易業者は陶磁器専門ではなかつたから、瀬戸・東濃に進出することはせず、一般商品の市場たる名古屋に支店を設け、こゝで仕入れを行つた。¹²⁾

輸出品は當初は花瓶・置物等骨董的なものに限つたが、次第に變化して、實用向な食器が中心を占めるに至つた。¹³⁾従つて、統一的な大量製品が要求されるに對し、瀬戸・東濃の小規模な陶磁業は、この要求に應じた供給は行ひ得ない。その結果、明治六年頃から、名古屋で、輸出業者或は輸出問屋と關連して、所謂錦襷による上繪付の發達を見ることゝなつた。¹⁴⁾

上繪付が名古屋を立地としたのは、次の如き事情の競合に基づく。第一に、意匠が重大な意義を有し、問屋の考案通り、且つ祕密を守つて繪付される必要から、問屋と遠く隔たれることは不可能である。第二に、上繪付を行ふ職人は、九谷・京都の移住者で、山間に居住することを好まない。¹⁵⁾第三に、原料の貯藏、成型後の

10) 愛知縣、愛知縣史、第十編、八五頁。瀬戸町誌、七一頁。

11) 名古屋市勸業課、前掲、五頁。

12) 名古屋市勸業課、前掲、八四頁。鐵道省運輸局、港灣と鐵道との關係調書、

名古屋第一輯、五四頁。

13) 名古屋鐵道局、前掲、二頁。陶磁器及土器ニ關スル調査、四二頁。商工省商務局、本邦輸出陶磁器取引情況、六頁、一〇頁以下。熊澤氏、陶磁器工業、

乾燥等が不要なために、餘り廣い場所を要せず、特に電氣燒成が行はれて後は、煤煙を發散することなく、手輕に行ひ得る。¹⁶⁾以上が重なる理由である。

上繪付の經營形態としては、問屋專屬の繪付業者が自宅で行ふものと、問屋の經營する小工場で行ふものとがあり、横濱・神戸では前者が普通であるに對し、名古屋は主に後の形態による。¹⁷⁾蓋し、上繪付の對象が實用的な大量製品であるがために、人的技巧よりも物的設備の方が重要なことに基づく。

上繪付が名古屋で行はれるに至つても、これに要する素地は、從來の陶業地たる瀬戸・東濃の供給に俟つた。何故と云ふに、素地は半製品の常として共通性に富むために、その生産は、問屋と隔たることをさまで苦痛とせず、原料たる粘土、燃料たる松薪の牽引力を強く感ずるからである。

併し、素地供給地として觀察するとき、瀬戸と東濃とはかなり條件を異にする。先づ瀬戸は粘土の獲得に不便である。これは二事情に基づく。即ち、第一に、

陶業における瀬戸・東濃・名古屋の關係

粘土の採掘は數百年續行された上に、これと松材の濫伐によつて生ずる山林の荒廢、下流の水害を防止するため、砂防工事が施行せられた結果、粘土の採掘は大いに制限され、到底需要の増大に應じ得ない。¹⁸⁾第二に、粘土の採掘地が少數に限定されてゐる許りでなく、製土業は、精製による歩減りが著しく、又、土漉機械その他かなり大なる機械設備を要し、且つ品質を統一せしめねばならぬがために、採掘地に集中してゐる。これに對し、舊來の登龍は總べて山腹傾斜の地點に廣く散在してゐるし、近時の築造になる石炭竈は、石炭が名古屋から供給される關係上、瀬戸の西縁に多い。従つて、製土業と竈とはかなり隔たり、多額の運送費を要する。¹⁹⁾然るに、東濃では、粘土が豊富な上に、産出する原土の品質に應じて、村落毎に製品を異にするから、かゝる不利は存在しない。次に、瀬戸は勞働者が乏しく、他から移住した勞働者を使用して粘土の採掘、成型・燒成を行はねばならぬために、勞働費が嵩むに對し、東濃では、女子勞務者の多數な事實²⁰⁾からも察

(最新化學工業概説、一三〇頁以下)。

- 14) 鐵道省本邦鐵道の社會及經濟に及ぼせる影響、一〇三二、一〇三七頁。
15) 商工省商務局前掲、三二頁、五八頁以下。名古屋市勸業課、前掲六八頁。
16) 名古屋鐵道局前掲、三三頁。
17) 名古屋鐵道局前掲、三五頁。
18) 愛知縣史、第七編、四三頁、第九編四頁。瀬戸町誌、三八頁以下、五九頁。

知される通り、一家舉つて勞働するものが多く、勞働費が少くて済む。その他、發達が遅いために合理化の容易であつた關係もあり、素地生産においては、東濃が遙かに瀬戸を凌ぎ、陶業全體として、維新前と主客位置を顛倒したのである。²¹⁾

上繪付は、瀬戸系統陶磁器の大量商品化に一階段を劃した。併し、この形態は、問屋と素地供給者との利害が一致し難く、製品を單に外形的に統一するに止まり、眞に向上せしめることは不可能であるから、大工場生産に至る一の過渡形態と考へられる。従つて、現在でも相當盛に行はれてゐるけれども、その製品は支那・蘭領印度等東洋・南洋向の、さまで高級なるを要しないものを主とし、經營の規模も小さく、數では一貫作業を行ふ大工場を遙に越えてゐるに拘らず、産額ではこれに及ばない。²²⁾

要するに、輸出向の大量製品を生産する必要から、上繪付が行はれるに至つて、從來單なる一市場に止まつた名古屋が生産部門に干興し、瀬戸・東濃の素地生

産と一種の分業狀態を形成した。併し、これは、文字通り表面僅かの變化に止まり、その影響として、瀬戸・東濃がその位置を顛倒した事實の方が、寧ろ顯著なのである。

三 名古屋における大工場生産

爾後の變化についても、種々の原因を列舉し得るであらうが、根本的な動因は、やはり、外國貿易の發展に基づく需要の變化、即ち、量的な増加と質的な向上とである。

名古屋陶磁器輸出の足跡を具體的に辿ると、先づ、日露戰役前後、他の多くの商品と歩調を一にして増加し、次いで、明治四十年名古屋開港の頃、輸出機關が次第に整備したことも、その勢を助けた。更に、世界大戰によつて世界の陶磁器國たる英獨からの供給が杜絶した際、これに代つて、南洋・米國等の市場に進出したことは、大正三年及び五年の輸出數量の大飛躍によつて、明瞭に看取される。又、開港後と雖も、大正末年

19) 活路、三四一頁。
20) 産業の調査、二五頁。
21) 小産調、六頁。
22) 中産調、九頁。
經濟部、關前、
經器、
社器、
報及、
新器、
時陶、
商工、

までは、港灣設備の關係上、米國輸出は、艘で四日市港に搬出し、こゝで本船に積替へるを要し、名古屋港からの直輸出は、南洋・東洋向だけに限られてゐた。²³⁾所が、第三期工事の完成によつて、紐育航路に従ふ一萬噸級船舶の入港が可能となつてから、米國輸出が便宜となり、大いに促進された。その結果、輸出數量が全體として大いに増加した許りでなく、品質の點で、高級品の占める割合が多くなつた。

需要のかゝる變化に應ずるがため、生産の機械化が實現することゝなつた。詳言すれば、同一形狀に成型するため、明治四十年頃から、電氣を動力とする機械轆轤の使用が始まり、又、次第に遠隔の地から供給され、従つて高價となつた松薪の代りに石炭を用ひ、火度の均一な高熱焼成によつて高級の大量製品を得んが爲めに、略々時を同じうして、石炭竈が普及された。²⁶⁾

この内、機械轆轤は比較的簡單な設備であるから、さまで影響しなかつたに對し、石炭竈は、陶磁業にとつて最も重大な熱經濟の根本に觸れ、しかも簡單で小規

陶業における瀬戸・東濃・名古屋の關係

模のものから、二段に築き、下段で本焼を行ひ、その餘熱を上段の素焼に使用するものまで、大小の差が甚しく、従つて、必然的に經營規模の相違を顯著にした。即ち、機械設備を完全にし、高級製品を大量に生産する大工場と、勞働力を頼みに、價格の低廉なことを利して販路を維持擴張せんとする小經營とが、對立するに至つたのである。

大工場制は、先づ、名古屋の上繪付に行はれたが、次第に素地生産に進出し、名古屋で素地から全製品まで一貫的に製造されるに至つた。この間に作用したものとしては、次の如き事情が數へられる。第一に、上繪付と素地生産とを分離した形態では、利害の對立があつて、製品を充分統一し、高級化し得ない。第二に、石炭を得るのに名古屋の大工場の方が有利である。蓋し、瀬戸・東濃は、搬入港灣と隔つてゐる許りでなく、中小經營で回收が困難なため、炭價中に多くの保険料を含むからである。²⁸⁾第三に、生産の機械化によつて、傳來の技術を體得した工人の意義が減じ、却つて、

第三十八卷 七六五 第三號 一三五

23) 本邦鐵道の社會及經濟に及ぼせる影響、一〇三七頁。港灣と鐵道との關係圖書、第一輯、五五頁。
24) 愛知縣內務部、愛知縣商工要覽、一八頁以下。
25) 關田氏、近代の陶磁器と窯業、二七頁。
26) 關田氏、前掲、二四頁。
27) 關田氏、前掲、一五頁。稻垣氏、地理上より見たる愛知縣の粘土工業

新式の教養を具へた技術者、一般の労働者が重要になつた。そして、技術・労働者を廣く求めることゝなれば、交通の要路に當り、人口の集中してゐる名古屋が、山間に僻在する瀬戸・東濃に、遙かに卓越してゐるのである。

唯、粘土の関係では、運賃及び歩減りの點で、名古屋は瀬戸・東濃に一步を譲らざるを得ず、従つて、この不利なるべく軽減せんがために、工場敷地として大曾根・千種等市の東郊が選擇される有様であつた。

所が、この不利は、間もなく消滅した。その原因はやはり需要の變化である。詳言すれば、輸出の大きいに増加した世界大戰當時から、製品の硬度を高めることが必要となり、そのため原料中に多量の長石質が配合せられることゝなつた。²⁹⁾ 長石は東濃にも幾分産出するけれども、讃岐・福島等他地方に廣く求めねばならず、特に石英粗面岩の分解によつて生成した天草石が盛に使用される。³⁰⁾ 所で、小船によつて佐世保に積出し、こゝで汽船に積替へて名古屋港に輸送される天草石につ

いては勿論、原料を廣く各地に求める上からは、海陸運輸系統の集合點たる名古屋の方が、一般に便宜となつた。

要するに、廣く原料を諸地方に求め、輸出向の高級な大量製品を、整備した機械的設備によつて、一貫的に生産する大工場は、悉く名古屋を立地とし、従つて、濃尾陶磁業の重心がこゝに移動すると云ふ重大な結果を來した。併し、かゝる大工場は、從來の中小經營の販路を奪ひ、これに取つて代つた譯ではなく、主に、新に開拓された需要を自己の分野としたのである。

結 言

以上の如き經路を経て、現在では、瀬戸系統の製品中には、廣く各地に原料を求め、最新式の技術・設備を利用した、世界の一流製品を見ることゝなつたが、この部門は名古屋を立地とする。他面、品質よりも價格の低廉を求める外國需要も少からず、これに對しては、名古屋の上繪付と東濃を主とする素地生産とが、

(地理學教材、第四輯、四七頁)。

28) 時事新報社經濟部、前掲、三四一頁。

29) 商工省商務局、前掲、一七頁以下。名古屋市勸業課、前掲、二二頁。鹽田氏前掲、四〇頁。

30) 港灣と鐵道との關係調書、第一輯、五三頁。

協力して供給に任じてゐる。更に、國內需要に應ずる製品の内、比較的統一されてゐる茶漬茶碗・盃等は、原料の豊富な東濃を、大量化の困難な種類は、古來の名聲、從來の顧客關係を頼む瀬戸を、それぞれ産地としてゐる。

勿論、これは圖式的な觀察の結果たるに止まり、各地區何れも種々の經營を包含してゐる。併し、大體に着眼すれば、上に述べた相違は見紛ふべくもなく、且つその原因を考究すれば、各種立地因子が微妙に絡みあつてゐる中で、需要の數量・性質が特に顯著に作用してゐる事實を、看取し得るのである。